

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第 卷六十四第

行發日一月二年三十和昭

論叢

歐米に於ける日本學研究に就いて……………經濟學博士 本庄榮治郎
 支那農業の片影……………法學博士 財部靜治
 銀行機構に於ける通貨の創作……………經濟學博士 小島昌太郎
 統計教育論……………經濟學博士 蜷川虎三

時論

昭和十三年度の増稅……………經濟學博士 汐見三郎

講演

新興化學工業……………工學博士 喜多源逸

研究

生命保險事業に於ける投資の特性……………經濟學士 西藤雅夫
 企業結合と外部節約……………經濟學士 田杉 競

說苑

一追放學者の觀たるナチスの經濟理論……………經濟學士 中川與之助
 ヴァイナナーの國際貿易論研究……………經濟學士 松井 清
 リカアドウの爲替論と購買力平價說……………經濟學士 有井 治
 リーフマンの問屋制度論……………經濟學士 堀江英一

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

リカアドウの爲替論と

購買力平價説

有 井 治

エンゼルの依れば所謂購買力平價説を最初に唱へたのはホイートレー¹⁾であり、次でブレーク²⁾之を説き、殊にホイートレーは眞實爲替相場 (real exchange) 即ち購買力平價と名目的爲替相場 (nominal exchange) とを區別し、其の關係に言及してゐるといふ³⁾のであるが、今我々の注意を惹くのはリカアドウの爲替理論とカッセルの購買力平價説とは實に酷似し、大體に於て後者は、前者の所説に基いてゐるといふ事實である。尤もリカアドウの金融理論には互に相矛盾する思想が存在する。従つて茲にリカアドウの爲替理論と云ふも彼の思想の一面を指稱するので、其の爲替理論の全部を意味するのではなく、其の購買力平價説的な一面を謂

ふ。即ちリカアドウの初期の論文、殊に『地金の高價』⁴⁾に於ける彼の思想は正に購買力平價説であると思ふ。此事はリヒターがカッセルの説を以てリカアドウ説の再生に過ぎないと力説する所である。依つて以下私はリヒターの所説を参照しつゝ此の問題に關し若干の考察を試る。但しカッセルの購買力平價説は餘りにも有名で、我國に於ても其の紹介と批評が既に相當多く、殊に最近谷口博士に依て明快な説明と批判が與へられたから、本文に於てはカッセルの主張に關する説明は之を省略し、主としてリカアドウの購買力平價説的な爲替理論に就てのみ論述する。

二

リカアドウの『地金の高價』は次の如き想定に始る。『政治的經濟學に於ける定評ある人々の考ふる所に依れば、世界の貨物を流通させる爲に用ひられる貴金屬は、銀行制度が生れる以前に、夫々の商業及び富の状態に従つて各國がなさねばならなかつた支拂の數と頻度とに應じて、一定の割合で分配されてゐた。斯の如

- 1) Wheatley, J.: Remarks on Currency and Commerce, London 1803.
- 2) Blake, Wm.: Observations on the Principles which regulate the Course of Exchange: and on the Present Depreciated State of Currency, London 1810.
- 3) Angel, J. W.: The Theory of International Prices, Cambridge, Mass. 1926, p. 51, 62.
- 4) Ricardo, D.: The High Price of Bullion, A Proof of the Depreciation of Bank Notes, London 1809, 4th. ed. 1811.

く分配されてゐる限り、貴金屬は到る處に於て同じ價値を有する……⁷⁾而して世界に存在する金銀の絶對的數量は、それが各國間に分配される割合に就ては何等の影響を持たない。蓋し金銀數量の齎す唯一の影響は財貨の價格の金銀に對する相對的な騰落に過ぎず、より、少い貨幣量はより、多い夫れと同様に流通手段としての職能を盡すからである。⁸⁾斯るリカアドウの思想は世界の財貨量と貨幣量とを對立せしめ、其の價値の比例を基礎とする彼特有の數量説をなす。所が或國の商業や財貨及び其の支拂の變化は貴金屬數量の新しい割合に應ずる分配を惹起す。⁹⁾斯る貴金屬數量の新しい割合に應ずる再分配が、如何にして起り又決定されるかは、右に述べたるが如き數量説と共に、リカアドウの爲替理論の根本思想をなすものである。

普通に知られてゐる如く、リカアドウの『地金の高價』は所謂通貨主義 (Currency Principle) の嚆矢をなすものであつて、通貨主義は銀行券を以て本位貨の代用物と觀る事と數量説を採る事とを以て其の特色とす

る。即ち準備金が増加すれば之と同額の銀行券が増發せられ、銀行券の増發は一般物價の騰貴を促し、輸出を妨げ輸入を促進する。輸入超過の結果は貴金屬の流出となつて現れ、従つて生ずる銀行券の收縮は一般物價を下落せしめ、他國物價と相平均するに至つて止む。而して斯る自働的調節作用を最も完全に營むものは金であつて、銀行券は其の伸縮性に於て金程には著しくないと謂ふのである。此點に就てリカアドウは一定數量の金は常に各國に於て同量の商品に對する購買力を有すると考へてゐた様である。

曰く『金の稀少性が其の價値を高める事は確であり、又其の結果として金が他の財貨との交換に於て、より多くの財貨を支配し得る様になる事も確である。併し金が如何に稀少であるとしても、金の價値が減價した通貨で測定せられるのでなければ、それが金の市場價格を造幣價格以上に著しく騰貴させる筈はない。』¹¹⁾而して『金の價格が騰貴したと云ふのは誤であつて、其の價値に變動を経験したのは、金ではなく寧ろ紙幣である……三磅一七志一片半の鑄貨の内に含まれてゐる金を以て獲得し得るのと同量の貨物を購ふ爲には、我々は世界の到る處の市場で四磅一〇志の銀行券を提供せなければ

5) Richter, B.; Das Wesen des Wechselkurses, München u. Leipzig 1934, 24. Cassels Theorie als Wiederbelebung der klassischen Wechselkurslehre—Ricardo redivivus. 6) 谷口尚彦著、外國爲替論 第一篇第十二章參照。
7) Ricardo, High Price of Bullion, Ricardo's Economic Essays, ed. by Gonner, p. 1. 8) ibidem p. 1-2. 9) ibidem p. 4. 10) Vgl. Wagner-Schönberg, Wörterbuch der politischen Oekonomie, I. Bd. S. 507.

ばならない。』¹²⁾『斯くて一國の通貨は貴金屬の數量に變化のない限り、久しきに亙り他國の夫よりより大なる價值を持ち得ないものゝ様に思はれる。』¹³⁾

リカアドウに依れば金屬本位の場合、即ち『流通媒介物が貶質 (debasement) せざる鑄貨、又は斯る鑄貨と即時に交換され得る紙幣から成立つてゐる限り、爲替は平價を中心として貴金屬の輸送に伴ふ諸費用より以上にも以下にも變動する筈はない』のであるが、『併し流通媒介物が減價せる紙幣から成立つてゐる場合には、爲替は其の減價の程度に應じて必然的に下落』する。

『夫故に、爲替は削り取られた鑄貨又は減價した紙幣から生ずる通貨の減價を判断すべきかなり、正確な標準 (criterion) である。』¹⁴⁾更に彼は云ふ、一千萬磅の代りに『若しも紙幣發行權の濫用に依て一千一百萬磅が流通上に使用せられたならば、爲替相場は九%英國に逆となるであらう。若し一千二百萬磅が使用せられたならば一六%、二千萬磅が使用せられたならば爲替相場は五〇%英國に逆となるであらう』¹⁵⁾と。

右の如きリカアドウの爲替理論は主として金屬本位國間に妥當するものであるが、紙幣國に於ては如何と云ふに、此の場合は金屬本位の場合とは其の機構を異にする。紙幣増發の場合は流通手數の増加、従つて其の價值の下落即ち一般物價の騰貴となるのであるが、流通手段の國外への流出は起らない。金屬本位國に於ては金屬の流出に依て國內の一般物價と他國の一般物價との均衡が回復されるのであるが、紙幣國に於ては流通手段の増加は一般物價の騰貴となり、従つて生ずる爲替相場の下落といふ迂路を通じて他國との物價均衡が行はれる。逆に云へば、外國爲替相場の下落は、紙幣本位國の物價が、他國の物價と均衡を得るに至る迄、即ち貨幣の購買力が、各國に於て均等となる迄繼續されて、此の均衡點に落付くとリカアドウは云ふ。此の主張は正に購買力平價説の精髓其物である。

曰く『何れか一國に於て……英蘭銀行の様な流通媒介物たる銀行券を發行する權能を有する銀行が創設されて、多額の銀行券が商人への貸出又は政府への貸上の方法に依て發行

11) "Three Letters on the Price of Gold," (Aug.—Nov. 1809) by D. Ricardo, ed. by Hollander, Baltimore 1903, p. 15.
 12) High Price of Bullion, Essays, p. 26. 13) ibidem p. 6.
 14) ibidem p. 19.
 15) Principles of Political Economy and Taxation, ed. by Gonner, p. 214.

せられ、其爲に通貨の額が著しく増加されたとすれば……流通媒介物の價值は下落し、それに比例して財貨の價格は騰貴するであらう。而して此國と外國との間の均衡は、鑄貨の一部を輸出する事に依てのみ回復されるであらう。¹⁶⁾

『流通手段が全部紙幣から成立つてゐる場合には、紙幣の増加は、それが他の財貨の價格を騰貴せしめるのと同じ方法で、而も同じ割合で、地金の——價值を下落せしめる事なしに、而も——貨幣價格を騰貴せしめ、且つ同じ理由から外國爲替を下落せしめるであらう。併し此の下落は名目的であつて眞實的ではない、従つてそれは地金の輸出を促し得ないであらう。蓋し此の場合には市場内の地金銀は増加せず、従つて地金の價值は些かも減少せないからである。』¹⁷⁾

而もリカアドウは一定量の貨幣は、それが金銀より成ると紙幣より成るとを問はず、常に世界到る處に於て同量の商品を購入し得るものと考へてゐた。『流通が過剰となる事は決してない。若しそれが金銀貨幣であるならば、其の數量の増加部分は何れも全世界に分布されるであらう。又若しそれが紙幣であるならば、其の發行國にのみ分布されるであらう。此後の場合には、増加部分が價格に及ぼす影響は國內的にして而も

名目的である。蓋し外國の買手は爲替に依て補償されるからである。』¹⁸⁾

以上之を要するに、リカアドウは金屬本位國と紙幣本位國とを分ち、(一)金屬本位國間に於ては數量説が其儘適用せられ、一般物價の均衡は夫々適當な貴金屬の配分に依て實現せられる。故に金屬本位國間に於ける爲替相場は、地金の平價を中心とし、其の輸出點と輸入點との間に變動するとす。次に(二)紙幣本位國の場合には數量説は當該紙幣國にのみ適用せられ、其の金屬本位國との一般物價の均衡は爲替相場の變動を通じて維持される。即ち紙幣本位國と金屬本位國との爲替相場は、他の事情に變化なき限り、紙幣増發の程度、従つて生ずる紙幣本位國に於ける物價騰貴の程度に依つて決定するとすのである。

リカアドウが二國間の爲替相場は兩國貨幣の對内購買力の比率に依て決定せられ、此の場合が平價をなすと考へてゐた事は、次の如くに表現されてゐる。『若しも一〇〇磅の對英爲替手形が、フランス及びスペインに於て、同金額の對ハンブルグ手形と同一數量の貨物を購入し得るならば、ハンブル

- 16) High Price of Bullion, Essays, p. 5.
17) ibidem p. 13 (傍點は原文の italics). S. also Principles Ch. VII, and Reply to Mr. Bosanquet's Practical Observations on the Report of the Bullion Committee.
18) High Price of Bullion, Essays, p. 35.

グ英國間の爲替は平價であるが、若しも一三〇磅の對英手形が一〇〇磅の對ハンブルグ手形と同じ丈しか購買し得ぬとすれば、爲替が英國に逆調なる事三〇%である。¹⁹⁾而して不利な貿易差額の爲替に及ぼす影響には一定の限度が存在し、其の限界は四又は五%である。一五——二〇%に達する爲替相場の下落は、貿易差額以外の一層永久的な原因に歸さるべきで、斯る爲替相場の下落は流通媒介物の減價に依て説明せらるべきであると謂ふ。²⁰⁾

三

上に述べたるが如きリカアドウの爲替理論は固より完全なものではない。而も茲に注意すべきは、彼の『政治的經濟及び課税の原理』第七章外國貿易論中には、以上の爲替理論と矛盾する幾多の立言ある事である。例へば生産技術や機械の改良・より、高き熟練・より、良き機械・課税の緩嚴・氣候の良否・天然資源其他生産上の便益多き國に於ては、財貨生産の爲により、少き土地と勞働とを必要とするに止るからより、安價に生産を營み得、従つて輸出超過を維持する事が出来る。斯る國に於ては輸出超過の結果金銀が流入し、此國に

於ける一般物價は他國より高位を維持する。従つて貨幣の價値は各國に於て異なるもので、此の場合各國の貨幣の對内購買力は、爲替相場に依つては表示せられ得ず、生産の不利なる國から金銀が流出し得ないとすれば、其の爲替相場は一〇、二〇、三〇%も逆調を示すと云ふが如き是である。此事はリカアドウの經歷から見て、彼の思想の變化と解し得ると信するが、²¹⁾今當面の問題でないから暫く之を措く。

併し又カッセルが引用する如く『爲替相場を論じ、各國に於ける貨幣の比較的價値を論ずるに當つては、我々は何れの國に於ても、其の貨物で評定せられた貨幣の價値を其の證據としてはならぬ。爲替は決して貨幣の比較的價値を、穀物・布又は其他何等かの貨物で測定する事に依て確められるものではなくて、一國の通貨の價値を他國の通貨で測る事に依て確められるものである』²²⁾といふ。此の思想からカッセルは、リカアドウが金屬本位國間の爲替相場のみを論じ、後世に所謂支拂差額説 (Balance of Payments Theory) を創始

19) Principles, p. 128-129.

20) High Price of Bullion, Essays, p. 28.

21) 拙稿、通貨主義とリカアドウの貨幣論—經濟論叢 28 卷 3 號(昭和 4 年 3 月號) 參照。

22) Cassel, G.; Money and Foreign Exchange after 1914, London 1922, 4th, Imp. 1927, p. 173-4.

したと主張するのであるが、リカアドウの右の言葉は考方に依ては購買力平價説の思想と解し得るのみならず、既述の如くりカアドウの初期の論文、殊に『地金の高價』に於ける彼の思想は正に購買力平價説であると思ふ。これカッセル自身のリカアドウの爲替理論に關する右の如き敘述あるに拘らず、我々はリヒターと共にカッセルの購買力平價説がリカアドウの爲替理論に基くと考へる所以である。尤もリカアドウは金屬本位國間の爲替相場を、カッセルは紙幣本位國間の爲替相場を、主たる考察の對象とした事の相違は之を認めなければならぬが、兩者の根本思想には殆ど差異なしと謂ひ得る。これナポレオン戦争後の歐洲の經濟状態と、歐洲大戦後の世界の經濟状態が頗る酷似し、同様の現象と問題と理論とを展開したに由るものではないからうか。唯だカッセルがリカアドウの論文を閑却した理由は、カッセルがリカアドウの論文集を讀まなかつた爲か、或は購買力平價説を其の獨創となす爲に敢て之に言及せなかつた爲か、之を詳にするを得ない。

リカアドウの爲替論と購買力平價説

因に所謂購買力平價説がカッセルの名の下に知られるに至つた過程は大體次の如きものである。即ちカッセルが其説を最初に發表したのは一九一六—一七年の大戦中の事で、²⁴⁾彼は二國間の爲替相場は當該二國間の一般物價水準の比に依て定るとし、貨幣數量説によれば、一國の物價水準は其の流通手段の數量に正比例して定る、故に此説を眞とすれば二國間の爲替相場は、其の流通手段の數量の比例に基いて決定されると考へ、之を理論的爲替 (Theoretical Exchange, theoretischer Wechselkurs) と名付けた。後に購買力平價 (Purchasing-Power Parity, Kaufkraftparität) の概念を導入して、二國間の爲替相場は先づ第一に當該二國間の貨幣の國內購買力の比に依て定められると主張した。²⁵⁾此説を有名ならしめたのは一九二〇年九月下旬から十月初旬に亘つてブラッセルに開かれた國際聯盟主催の國際財政會議であつて、カッセルは此の會議の爲の覺書²⁶⁾を發表し、多くの賛成者と支持者を得て彼の説の地位は確立した。一九二二年に至つて『一九一四年以後の貨幣及び外國爲替』²⁷⁾が出版されて、彼の購買力平價説は完成した。カッセルの名著『社會經濟學』²⁸⁾は最初此の敘述を含

23) Ricardo, Principles, p. 128.

24) Germany's Economic Power of Resistance, Stockholm 1916; The Present Situation of the Foreign Exchanges, Econ. Journal, March & Sep. 1916; The Depreciation of Gold, E. J. Sep. 1917.

25) Abnormal Deviations in International Exchange, E. J. Dec. 1918, p. 413.

26) Memorandum on the World's Monetary Problems, Brussel & London 1921. 之は Das Geldproblem der Welt, München 1921 の底本である。

27) Money and Foreign Exchange after 1914, London 1922; Das Geldwesen nach 1914, Leipzig 1925.

28) Theoretische Sozialökonomie, Leipzig 1918, 5. Aufl. 1932.

29) Memorandum on Stabilization, London, June 20th. 1933.

まなかつたのであるが、一九二一年の第二版以來購買平價説の要領を主として第五節で説明し、一九二七年の第四版以後は第五編外國貿易論を追加して更に其の説明を補うてゐる。一九三三年六―七月の倫敦に於ける世界經濟會議に際してカッセルは『安定に關する覺書』²⁹⁾を發表したが、此際彼の説に對して種々の反對や批評が盛に論議せられた。此事はカッセルの購買力平價説が一の學説として既に十分の地位を占めた事を裏書してゐるのである。